

ことだった。

「まことか、丸井まらいっ」

「ははっ……どこにも姿が見当たりませぬ……」

息を切らせて玄関に駆けこんできたのは、井坂家に代々仕える用人の丸井権兵衛ごんべえ。自ら調べて回つたらしく、しわの目立つ顔が汗にまみれ、白髪まじりの鬚まげは乱れていた。

「ううむ、こまつたまねをしてくれたのう」
りりしい顔をゆがめて、多門はうめいた。

「ゆゆしきことなれど、わしはつとめを休むわけにはまいらぬ。丸井、後をたのむぞ」

「こ、こころえました」

権兵衛は息を切らせながらも白髪頭を下げ、玄関を後にする多門を送り出す。

「水瀬よ、恩知らずにもほどがあるぞ……」

誰もいなくなつた玄関で悲しげにつぶやく権兵衛は昨年の春、多門が命の恩人だと屋敷に連れてきた十蔵じゅうざうを疑つて居候いさうをさせることに最後まで反対した。その後の働きぶりを見て考えを改め、先日の御前試合ごぜんあひあひで勝ち抜いたときには我がことのように喜んだ権兵衛であったが、今となつてはむなししいばかり。何が不満でいなくなつたのか、まったく見当がつかずにいた。

他の家来と奉公人も、総出そうでで十蔵を探していた。

「水瀬どのー」

「十蔵さまー」

屋敷じゅうの騒ぎをよそに駒場こまば一郎はひとり、けいこ場けいこで木刀を振るっていた。

屋敷内やしきうちに設けられたけいこ場は、多門の家来とその息子たちが剣術の腕をみがくための場所。亡き父の親友だった多門に姉の清香かほと共に引き取られた一郎も四年前、六歳になつた年から毎日欠かさず取り組んできた。

「いち、に、いち、に」

前へ踏み出しざま振り下ろし、後ろに下がりながら振りかぶる木刀は刀と同じ長さで、刀身とうしんに当たる部分だけでも二尺にせき（約六〇センチ）を超える。小柄な一郎では持て余しそうな長さだが少年の腰はすわっており、床から足の裏を離さずに移動する、すり足もできていた。

子どもはすり足が苦手で、前後に動きながら跳びはねてしまいがちである。一郎も癖くせになつていったが井坂家の居候となつた十蔵の教えを受け、正しい足さばきが身についたのをきっかけに自信を持ち、今では兄弟子たちに負けないほど強くなつていた。

城下町は今日も朝から晴れていた。

武者窓むしゃまどごしに照りつける夏の日射しは強く、ほおを伝い流れた汗が目の中まで流れこんでくる。それでも一郎は手を休めることなくどنگりまなこを見開いて、しゃにむに